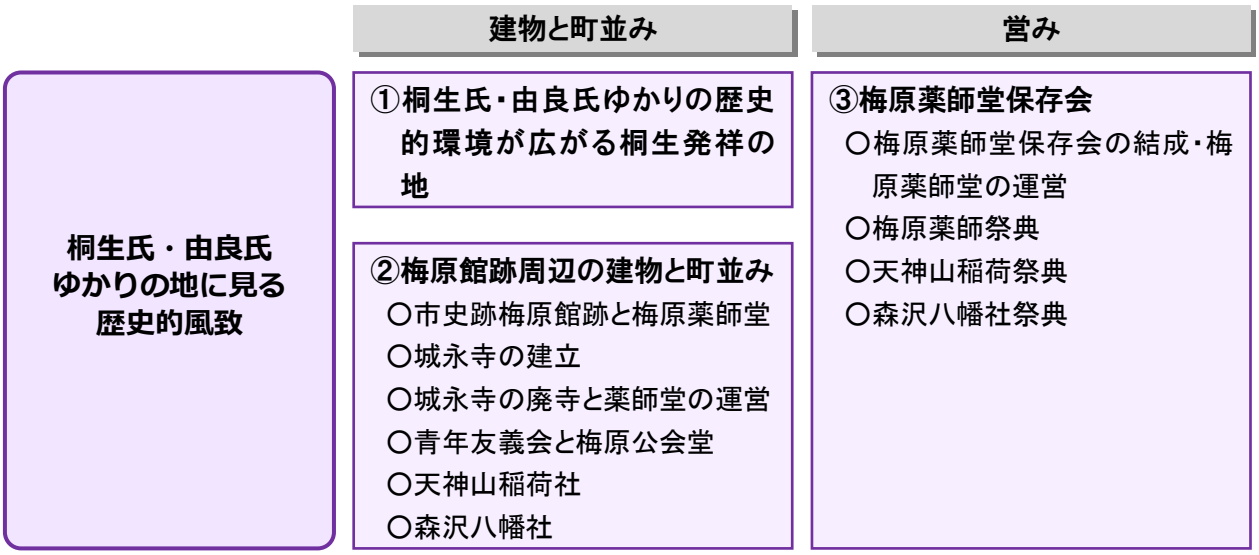
２．桐生氏・由良氏ゆかりの地に見る歴史的風致

桐生新町を走る本町通りを北に抜け、左右を山々に挟まれた桐生川右岸の地域が、平安時代末から中世にかけて桐生氏・由良氏が治め、桐生発祥の地とされる梅田町周辺地域である。

日本の歴史書に初めて「桐生」という名が登場したのは、12世紀後半に、桐生氏の始祖とされる桐生六郎が入部し、居館を構えた時である。桐生六郎が居館を構えた場所は現在の市史跡梅原館跡であるとされている。桐生六郎滅亡から、佐野氏一族の桐生国綱が現れるまでは空白期間となっており、両者の関係は不明であることから、六郎は前桐生氏、国綱の一族は後桐生氏とも呼ばれている。桐生国綱は、正平５年・観応元年（1350）に桧杓山城を築城し、以来10代、約220年に渡って桐生を統治した。

その後、天正元年（1573）、新田郡金山城主の由良成繁によって桐生氏は滅亡し、由良氏の統治となった。成繁の子・国繁の時代の天正18年（1590）、由良氏は常陸国牛久に領地替えとなったため、由良氏の統治は２代18年で終わり、同時に桧杓山城も廃城となった。

桐生氏、由良氏によりその礎を形成したこの地域には多くの両氏ゆかりの歴史的環境が広がっている。



桐生氏・由良氏ゆかりの地に見る歴史的風致の体系図

①　桐生氏・由良氏ゆかりの歴史的環境が広がる桐生発祥の地

桐生六郎が居館を構えたとされる市史跡梅原館跡から北に約1.6キロメートルの場所には、桧杓山城の本丸・二の丸・三の丸があり、また、梅原館跡と桧杓山城跡の間には、桐生氏の菩提寺である西方寺が立地している。梅原館跡（居館・のち下屋敷）から、西方寺（菩提寺）、桧杓山城跡（山城）は計画的に南北に一直線に配置されており、戦国時代の築城形態をそのままとどめているのが分かる。

桧杓山城跡は市の指定史跡で、桐生国綱が正平５年・観応元年（1350）に築城したとされる。標高361メートルの本丸を斗口とし、二の丸、三の丸を柄とする柄杓型の梯郭構造で、堀切、武者屯、郭馬出しなどが残されている。また、由良成繁の時には城の大改修が行われており、北郭の一部においては中世山城では珍しい石垣も発見されている。

国綱は、築城の際、居住地を山麓の現在の渭雲寺付近につくり、梅原館を下屋敷とした。そのことから、渭雲寺周辺の「居館」をはじめ、その周辺には「御屋敷」、「大門」、「城ノ前」などの地名が残る。なお、渭雲寺は、由良成繁の次男で、国繁の弟、渡瀬（横瀬）繁詮が、桐生氏を滅ぼした天正元年（1573）に創建したとされている。

梅田町の位置

桧杓山城跡

桧杓山城の周辺には、渭雲寺の他にも、桐生氏や由良氏にゆかりのある社寺などが鎮座する。桧杓山城の南には、国綱が正平５年・観応元年（1350）に建立した浄土宗西方寺と、同年に移築された日枝神社が立地している。

西方寺は、桐生豊綱の代に臨済宗に改め、由良氏に滅ぼされるまで桐生氏累代の菩提所として庇護されてきた、桐生氏にゆかりが深い名刹である。本堂には、桐生家７代の位牌や大炊助助綱使用と伝わる鐙、ご本尊として鎌倉時代の作とされる木彫阿弥陀如来像（県指定重要文化財）を安置する。その胎内には「大炊助助綱」の墨書銘も見える。本堂西側にある斜面の高台には、桐生氏累代の墓（市指定史跡）があり、層塔１基、五輪塔13基が並ぶ。このうち４基だけ銘文が判読でき、義綱、親康、重綱、助綱のものとわかる。この場所からは、西方寺本堂を眼下に、館や城下を一望できたものと思われ、立地的な意図を感じる。

西方寺

日枝神社は、背後に桧杓山を抱き、その東麓のうっそうとした木々の中に鎮座している。元々、桐生六郎が桐生に入部する際に、現在の場所から北東の位置に、近江国日吉神社から分霊勧請したのが始まりとされる。その後、城の守護神として、桧杓山城本丸の真下、当時の居館の鬼門（北東）に位置する現在地に移した。本殿は文政２年（1819）、拝殿は安政２年（1855）に改築されたものである。国綱は、この地に移した際に、神祠を建て、ご神木としてクスノキを献じた。境内には、目通り４メートル、推定樹齢600年を超える４本のクスノキ（県指定天然記念物）がそびえており、その時に植えた５本のうちの４本とされている。さらに、国綱は、物見砦を各所に配置するとともに、外堀（遠構え）として、およそ2.5キロメートルにわたる下瀞堀（現在の新川）を掘るなど、非常に堅固な城であったことがうかがえる。

日枝神社のクスノキ群

その後、桐生氏を滅ぼした由良成繁は、菩提寺として桐生山鳳仙寺を開基するとともに、青蓮寺、母衣輪権現の建立、普門寺・泉龍院と立て続けに移築・建立した。

天正２年（1574）に創建された鳳仙寺は、当時の由良氏の勢力を示す市内最大級の伽藍規模を誇る。入母屋造平入銅板葺、市内唯一の伝統的な八間取り構成からなる大規模な方丈形式で、享保11年（1726）に改築された本堂のほか、山門（楼門）・輪蔵（以上、市指定重要文化財）・冠木門・開山堂・秋葉三尺坊大権現堂・鐘楼等がある。梵鐘は、市内最古のものであり、銘によれば寛永18年（1641）に、藤原朝臣江田讃岐守安重が鋳造したもので、天命（佐野）の代表的な鋳物師とされる。また、本堂裏の台地には、総高125センチメートルの退化型五輪塔で、市の史跡に指定されている成繁の墓がある。

鳳仙寺山門

青蓮寺は、『天正遺事』には、天正３年（1575）、由良成繁によって新田領内の岩松郷（現太田市岩松町）よりこの地に移建されたと記されている。現在の入母屋造瓦葺の本堂は、延享年間（1744～1747）に建築されたと推定され、須弥壇[29]や欄間には、国宝である妻沼聖天山歓喜院聖天堂（埼玉県熊谷市）に携わった石原吟八ら一流の彫物師集団による豪華な彫刻がなされており、織物産業

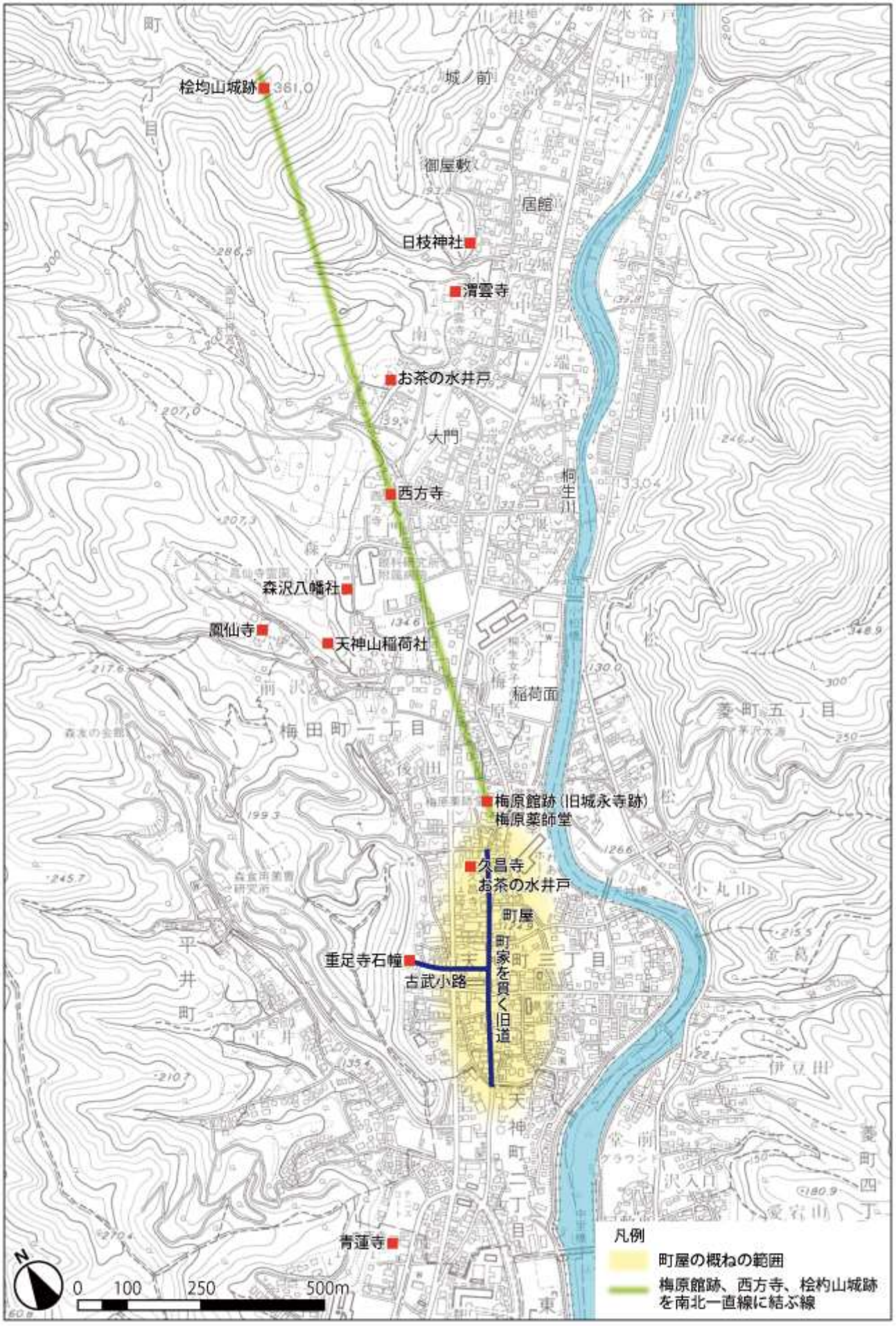
青蓮寺

29）仏像等を安置するために床より一段高く設けられた場所のこと

により隆盛を極めた桐生の経済力の表れでもあったと考えられる。

本尊は、鎌倉時代に製作された、善光寺式阿弥陀三尊仏の銅製鋳抜き立像で、中央に高さ55センチメートルの阿弥陀如来、脇侍に観音･勢至菩薩が配されている。「銅造阿弥陀如来及両脇侍立像」の名称で、国の重要文化財に指定されており、毎年秋の彼岸中日に公開されている。

このように、桐生発祥の地である梅田町周辺地域には、多くの桐生氏、由良氏にゆかりの深い城跡や寺社などが立地し、その名残をとどめ、まさに桐生発祥の地と呼ぶにふさわしい歴史的環境が形成されている。



桐生発祥の地に関わる建物と町並みの分布

②　梅原館跡周辺の関連する建物と町並み

桐生六郎が居館を構えたとされる梅原館跡の一画には、桐生氏の守本尊とされ大正10年（1921）に改築された梅原薬師堂、それに隣接して昭和10年（1935）に建てられた梅原公会堂の２棟の歴史的建造物が立地している。

梅原薬師堂

梅原公会堂

梅原館跡の北西には、鬼門除けとして祭られたとされる天神山稲荷社、桐生氏重臣の守本尊とされる森沢八幡社がそれぞれ立地している。

梅原館跡を起点とし南に広がる「町屋」と呼ばれる地区は、由良成繁が梅原館から南へ一本の道を通し、両側に集落をつくり領民を住まわせたと言われる。桐生新町が町立てされる天正19年（1591）以前には、桧杓山城下町として、桐生の中心として栄えていた。「町屋」は現在の天神町二丁目と三丁目の一部にあたるが、ここには、今でも中心の通りはそのままに、当時の町割りが一部残っているとされる。城主お茶水の井戸跡や、南には、当時、出陣に際し武者たちが勢ぞろいし、城下や領民から激励を受けた場所と伝えられている古武小路と呼ばれる細い路地も残る。その突き当たりが桐生方の城代家老が陣を構えた重足寺跡で、その頃に建立されたとされる「重足寺石幢」（市指定重要文化財）が存在する。

梅原館跡周辺には桐生氏、由良氏に関連の深い歴史的環境が色濃く残っており、現在の市街地の基礎はここから始まったといえる。

古武小路

ア．市史跡梅原館跡と梅原薬師堂

前述の「町屋」地区の起点となった梅原館は、現在、梅原館跡として市指定史跡となっている。当初、一辺約120メートルの正方形の南一方口堀の内式平城で、周囲に土塁と堀を巡らせたものであった。現在では、大部分が、道路や住宅地となっているが、西側、南北側の一部には土塁が残され、その外側には掘跡の痕跡が認められる。

現在の土塁

史跡の一画には、梅原館の守護神、桐生氏の守本尊として遷座したものと伝えられている梅原薬師堂が建立されている。「薬師堂文書」によれば、文治２年（1186）に鎌倉より遷座とある。元々現在地より南東50メートルの、城郭の外側の虎口付近に堂宇[30]が位置したとされるが、明らかではない。

現在の薬師堂は、大正10年（1921）に改築されたもので、それ以前については、元文２年（1738）の棟札が残され少なくともその当時から存在していたとされるが詳細は不明である。間口14尺、奥行き12尺、畳10畳敷で、屋根は瓦葺、入母屋造りで、正面の一間に向拝を設え、背面に下屋を出し、これを祭壇にして薬師十二神将（薬師三尊と十二神将）が安置されている。「梅原の薬師さま」として地元住民の間では古くから、眼病など病気平癒の守り神として厚く信仰されている。

薬師堂側面には、雲間に鶴が優雅に舞う格調高い装飾彫刻がなされた元文２年（1738）の中興の際のものと思われる妻飾りの懸魚、正面の扁額の額縁には、二頭の龍が波にたわむれる、巧みな透かし彫りがされている。「薬王殿」と書かれた額字は、大正・昭和における日本宗教界の三筆と称された能書家菅原時保によるものである。堂内の長押上には、寛政８年（1796）に書かれた能書家長沢是水の書である扁額も掲げられている。質素なたたずまいの中にも彫刻や扁額の品格が見事に調和し、薬師堂の威厳が保たれている。

また、史跡内には、多くの石仏や墓石が存在している。ここが一時、瑠璃光山城永寺という寺域であったことの名残をとどめたものである。扁額を残した是水の墓は、薬師堂裏手の土塁上に、筆、硯、手本書を形象した稀有な石塔として残っている。

これらの建造物を維持継承してきた歴史的な背景に、先人から続く文化財保護意識の高い地域性や連帯感の強い地域性をうかがい知ることができる。

薬師十二神将

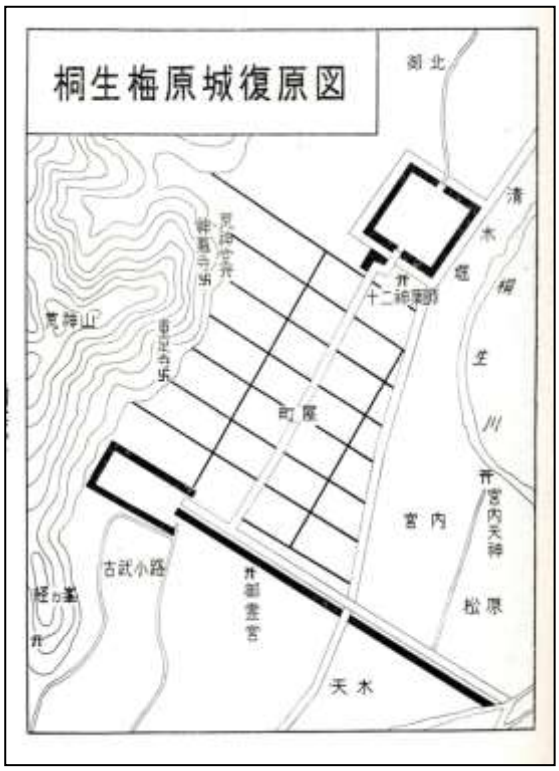
扁額

妻飾りの懸魚

城永寺の名残の墓石

30）お堂のこと

梅原薬師堂周辺の配置



桐生梅原城復原図（出典：桐生市史（昭和33年））

イ．城永寺の建立

後桐生氏（桐生国綱）によって下屋敷となった梅原館は、戦国時代には、由良氏の手に渡り、ここを起点とした城下町（町屋）が整備され、まちの中心として機能していた。桐生・由良両氏の庇護により、約400年以上にわたり、守られ栄えて来た。しかし、時代の推移により、桧杓山城が廃城となり、この地も荒廃していった。

廃城後、桐生は徳川家康の直轄領となり、新たに町立てするにあたり、この町屋では規模が小さかったため、南に位置する荒戸村と久方村を割き、桐生領の起点として、整備されたのが桐生新町である。梅原にあった梅原天神は、桐生新町の宿頭（現在の桐生天満宮）として移設された。

その際、梅原館は、桐生新町に引き込む用水路の流路となったことで二分された。薬師堂文書によると、地元民はこの屈辱ともいえる行為によって、この地に梅原館（城跡）が存在したことを永久に伝え残そうと、館跡地を寺域として「瑠璃光山城永寺」を建立した。創建されたのは、不明な点も多いが、桧杓山城の廃城後間もなくと考えられ、この時、城郭の外にあったとされる薬師堂を、現在地である寺域内に移築し、薬師十二神将も遷座されたものと考えられている。

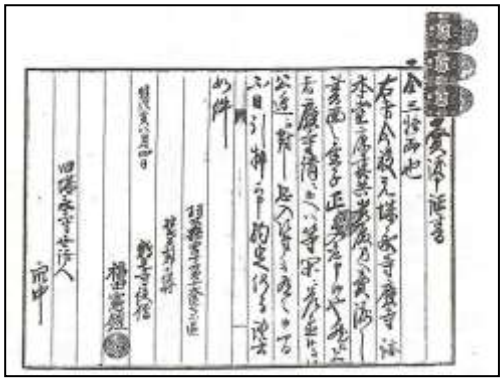
その後、薬師堂文書や棟札からは、元文２年（1738）に薬師堂が再建（中興）されたことが分かり、城永寺としての伽藍も整ったとされる。多くの民衆により「梅原の薬師さま」

薬師堂の棟札

が支えられ、法灯が守られた。文政13年（1830）の城永寺世話役には、名主吉左衛門、組頭清吉、長沢一家惣代市郎左衛門、壇中惣代久左衛門ら地元民の名前が散見できる。

ウ．城永寺の廃寺と薬師堂の運営

明治時代に入り、神仏分離令によって檀家の少なくなった城永寺は、経済的に厳しい状況もあり、明治７年（1874）に廃寺に追い込まれ、足利の鶏足寺が全てを引き取ることになった。しかし、桐生氏以来の由緒ある地元の拠所として、薬師堂を存続させるため、村役人であり世話人であった岡田徳三郎や小野里八百吉ら11名が、三十両[31]を拠出し、鶏足寺に働きかけた結果、形式的には廃寺としたが、寺域の伽藍を取り壊すことなく残すことができ、由緒ある薬師十二神将は、そのまま地元世話人に引き継がれることになった。その後、明治12年（1879）には、二百四十円余を投じて薬師堂の大普請や薬師十二神将の修理も行われた。当時、三十両、二百四十円という巨額のお金を拠出してまでも、残したいという地元民の結束力と強い熱意を感じる出来事であり、信仰心の厚さも伴って、薬師堂の伝統と歴史を今に継承している。



金三十両を拠出した事を示す証書（明治８年）

借家証書（明治33年）

この頃、薬師堂では、収入を補うために当時としては画期的な方法により運営していたことが、明治33年（1900）の『借家証書』によりうかがえる。昭和57年（1982）まで存在していたという間口５間、奥行４間の薬師堂所有家屋を貸家とし、家賃収入を得るとともに、２階部分を集会所として利用していた。その家屋が建てられた時期は不明だが、地元では150年近く風雪に耐え、集会所の象徴的な存在として利用されていたという。まさに桐生における集会所の第１号としての存在として、今でも地元民の誇りになっている。

エ．青年友義会と梅原公会堂

上記のように地元民が一丸となり継承し、先進的な考えを取り入れ実践してきた事実に相容れる取り組みとして、この地元の若者中心で結成された「青年友義会」がある。

天保年間（1830～1844）に存在していた若衆組という若者仲間が、明治時代に入り青年会に発展し、地域内の僅か13～25歳の若者20人により、明治28年（1895）に結成されたものである。青年同士の親睦はもちろん、地域のため社会奉仕や、公共施設の修復普請等の活動を行ったほかに、貯金、勉学、植林事業等を行っている。その植林事業によって得た資金で、昭和10年（1935）に建てられたのが現在の「梅原公会堂」である。薬師堂に隣接した位置に建ち、間口８間半、奥行５間で木造平屋建て鉄板葺の建物である。青年友義会

31）現在の貨幣価値は一概に言えないが、『史跡梅原館跡』によれば現在の周辺地価と当時の薬師堂所有地売却入札金とを単純比較すると４千万円前後ではないかとされる

や地域の活動拠点とするため青年会館として、自分たちで建てたものである。建物内部における什器などの備品も全て青年友義会が自前でそろえて完成させ、建物とともに地元に寄附している。現在は、梅原薬師堂保存会が、集会所として、地元民のコミュニケーションの場として有効に活用している。中央に玄関の土間があり、左手に一段高くなった21畳ほどの大広間が広がる。当時の柱や建具、机や什器がそのまま使用され、歴史の趣を漂わせている。維持管理は、以前の集会所と同じように、管理人を住まわせ、賃料の収入を得る運営方法が踏襲されている。近年では、サッシや屋根の補修が行われている。なお、大正10年（1921）の薬師堂改築には、その費用を青年友義会が貸し付けている。

大正10年薬師堂改築の落慶記念写真

オ．天神山稲荷社

天神山稲荷社は、梅原館跡の北、鳳仙寺参道の右手に位置する天神山と称される小丘の上に鎮座している。いつこの地に祭られたのか明らかではないが、一説によれば、梅原館の鬼門（北東）の方向に「稲荷面」という小字名が残る場所（現在の桐生女子高周辺）に鬼門除けとして祭られていたと言われている。しかし、度重なる桐生川の氾濫により、現在地に移されたとされる。天神山からは、桐生氏、由良氏に関わりの深い桧杓山城、西方寺、梅原館、町屋、鳳仙寺を見渡すことができ、物見山としてのこの位置に、意図的に移されたものとも考えられる。鳳仙寺絵図（寛文12年（1672））には、寺領内に天神山と社殿が描かれている。鳳仙寺の鎮守神としての位置付けもあったものと思われる。

天神山稲荷社

天神山山頂には、広い平らな境内地が広がり、石鳥居、覆屋の中に稲荷社、その左に石祠が４基鎮座している。現在の稲荷社社殿は、大正４年（1915）に広沢村の田島家から譲受け、当時25軒の住民総出により現在地へ移設したものである。石祠の２基については、「安永五年」（1776）、「安永六年」（1777）の銘が確認できるが、２基についてはより古いものと思われ判読不可である。梅原薬師堂保存会においては、昭和57年（1982）に現在の覆屋と鳥居を奉納している。

文政13年（1830）の文書には、稲荷大明神は城永寺が別当である旨や、修理伺いについての記述が見られ、当時は、現在より大きな社殿が存在していたものと思われる。

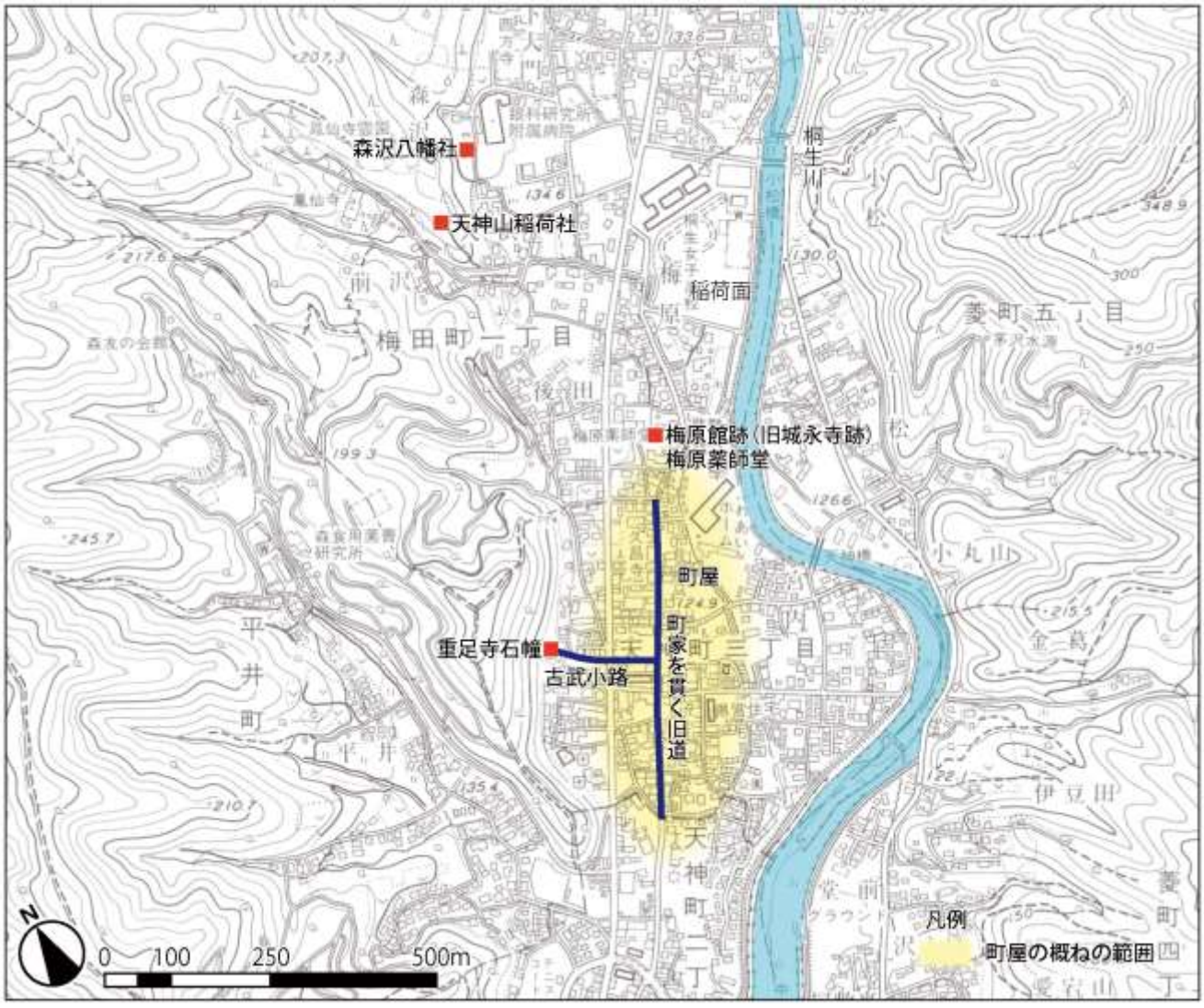
４基の石祠

カ．森沢八幡社

鳳仙寺の参道入り口の右手、天神山稲荷社の小丘東側法面にある文字塔脇の石段を登ると、中腹の僅かな平地の正面に、木造の小さな祠と、その左に流造りの石祀が鎮座している。この小丘の麓は、桐生氏の重臣であった谷直綱屋敷跡と言われており、その守本尊と伝承されているのが森沢八幡社である。その地に隣接し、由良氏の家臣を遠祖とし、代々家系を守り続けている田中家に伝わる文書（天保３年（1832））には、田中家氏神として、初代庄兵衛が、新田（現太田市）の田中神社から勧請し、現在地に遷祀したとある。さらに、天保３年（1832）に社殿を建て替え、住吉明神、若宮八幡を相殿神として祭ったとある。

地元では「森沢の八幡さま」と住民に親しまれ、古くから祭礼が行われ、今に継承している。戦時中には、ここでこの地域の出征兵士の無事を祈願し、後に全員無事帰還したという霊験あらたかなご利益も言い伝えられている。

森沢八幡社



梅原館跡周辺の建物と町並みの分布

③　梅原薬師堂保存会

梅原薬師堂では、地元住民により結成された梅原薬師堂保存会が、薬師堂の維持管理や祭礼を継承するなどの営みが行われている。

ア．梅原薬師堂保存会の結成・梅原薬師堂の運営

城永寺や薬師堂を必死で守り抜き、地域の由緒を継承してきた地元民の連帯感と文化財保護意識の高さ、地域に積極的に関わる若者を中心とした青年友義会の奉仕や自立心、こうした先人からの遺志や精神を基に、その歴史と伝統を引き継いだのが「薬師堂保存会」である。梅原館跡が市の史跡に指定された昭和37年（1962）に結成された。江戸時代の信徒総代が記した「既往記事集録」には、薬師堂の財産管理についての記載があることから、その頃には実態があり、明治には前述のとおり地元世話人の巨額の拠出金で薬師堂が守られ、それから代々地元民に引き継がれてきた活動が、保存会の結成に至ったものである。昭和56年（1981）には、同保存会を発展的に解消し、新たに現在の「梅原薬師堂保存会」として120名の会員により再結成した。７章42条からなる会則も定められ、「薬師堂の維持管理や梅原公会堂の維持管理、梅原薬師の祭典、天神山稲荷の祭典等の運営等により、地域の精神的・文化的遺産の継承や住民福祉と文化の向上に資すること」を目的としている。平成27年（2015）時点の会員数は75名である。

保存会では、結成以降、歴史遺産の保存継承の取り組みを継続的に行っている。会員向けには、桐生発祥の地としての桐生氏、由良氏の歴史と梅原館や薬師堂・梅原公会堂の歴史をまとめた説明資料を配布するほか、敷地入り口には、標柱や案内板をつくり周知を行っている。平成３年（1991）には、薬師堂前の広場を広げて有効に利用するため、梅原公会堂を曳家し現在の位置にまで移動させた。また、古くから続く祭礼を行い、地域の歴史や文化を子どもへ継承するなど、地域ぐるみの取り組みを行っている。

既往記事集録（江戸後期）

梅原公会堂での保存会役員会の様子

イ．梅原薬師祭典

薬師堂では、毎年７月の土用の丑の日に近い日曜日と、10月12日に近い日曜日にそれぞれ祭礼が開催されている。

祭礼の始まりは定かではないが、江戸時代から続いているとされる。明治14年（1881）の文書には、毎年４月12日と10月12日に行われている旨が書かれている。また、毎年７月の土用の丑の日には、「土用念仏」と呼ばれる民俗行事も行われていた。土用念仏の起源も明らかではないが、江戸時代末期と伝えられている。

祭りが盛んな頃は、梅原館敷地を分断した大堰用水に設置されていた水車を動力に、か

らくり人形などの見世物や草相撲が奉納され、屋台店も多く出てにぎわいを見せていたという。そのため、現在、土塁上に残されている墓石の中に、江戸相撲の花形力士の墓が２基あるとも言われている。昭和初期までは祭りは盛大を極めていたものの、戦争が始まると、一時、土用念仏が中断された。戦後、何とか子ども達に地域密着の行事を伝えたいと、当時の古老たちによって盛大に再開された。以後、４月の祭礼は行われなくなったが、夏と秋の毎年２回の祭礼は、保存会の運営により、継承されている。薬師堂の中には、大正時代に寄進された提灯も残されており、当時の隆盛ぶりがしのばれる。

祭礼の約１か月前には、梅原薬師堂保存会の役員会を梅原公会堂で開催する。役員会では、会長を中心に、開催日程の確認と当日の運営について確認し合う。

祭礼当日の朝には、役員が集まり、史跡である土塁の草刈りや薬師堂の清掃を行い、汗を流すのが恒例となっている。その後、提灯の取付けや大幟の設置、直会準備をして午前はいったん解散となる。

保存会による清掃活動

大幟を設置する

祭礼の象徴ともなる大幟は、現在は、昭和59年（1984）に保存会で製作したものを使用している。「奉納梅原薬師十二神将祭禮」を基本とし、土用念仏の時には、「梅原薬師土用念仏祭禮」と書かれた幟旗、秋の大祭の時には、「蕪民将来之子孫繁栄」と書かれた幟旗がそれぞれ設置される。いよいよ祭礼が始まるという一体感や高揚感に浸る。

当日の午後、続々と地元住民が薬師堂に参集する。まずは、薬師十二神将への献香と読経から祭礼が始まる。かつては、桐生氏にゆかりが深いため西方寺の住職が法話や読経をしていた。参加者全員が、一人ずつ、十二神将に頭を下げ焼香し、次いで般若心経を全員で複数回読経する。

読経の様子

その後、薬師堂前の広場に人々が集まり、土用念仏を執り行う。直径３メートル、全長９メートルもある大きな数珠を20人くらいの人が輪になって囲み、これを両手に持つ。鉦を持った音頭とりが内側に入り、鉦をたたきながら、太鼓の音とともに念仏を唱える。「ナムアミダブツ、ナンマイダ・・・」と、周りの人も一斉に念仏を唱えながら左回しで数珠を繰廻す。数珠についた房緒が自分の前に回ってくると、額に房を戴き無病息災や悪霊退散を願う。次第に、鉦のリズムが速くなり、廻る速さも速まり、それに合わせて数

珠の引き合いになる。かつては、この引っ張り合いが、次第に激しくなり、敷地内を所狭しと駆け回っていた時もあった。一種の奇祭として、今に伝えられている。

地域に根差した素朴な祭りとして、地元住民の間では親しまれている。現代社会において、地域のコミュニケーションの場としても重要な位置づけとなっている。

土用念仏の様子（上：現代／下：昭和57年）

ウ．天神山稲荷祭典

江戸時代より続く天神山稲荷の祭りがある。毎年４月上旬の日曜日に行われ、神事と直会だけの素朴な祭りであるが、地元住民総勢で行われる、地域に根差した祭礼として続けられている。

祭礼の始まりについては定かではないが、慶応４年（1868）の文書には、「初午の祭典」の記述があり、この頃には既に行われていたことがうかがえる。元々、豊作祈願を原形とし毎年２月の初午に行われていたが、昭和30年（1955）頃からは４月上旬に行われるようになった。

祭典準備の様子

祭り準備は、地域住民の輪番制により行われる。参道や周辺の草刈りや清掃も、事前に若手により行われる。当日は、社殿に、注連縄、御幣、榊、神饌などの準備や、直会のための酒肴の手配などを行う。

当日、時間になると、地区代表などの役員や保存会関係者等が稲荷社前に集まり神事が始まる。神職により、神前や参列者を祓い清める修祓に始まり、献饌、祝詞奏上や玉串奉てんなどが行われ、二礼二拍手、深く一拝で神事が終了する。その後、山を降り、直会が行われる。直会には、子ども達も含め、地域住民が参加する。以前は、稲荷社前の広場に車座になって直会を行っていたが、近年は、天神山麓の広場や建物内で行われている。

天神山稲荷祭典の様子

直会の様子

江戸時代から地域で継承されてきた祭礼は、桐生氏、由良氏のゆかりの地において、古くから地域を特徴付けている地域の連帯感を感じさせる祭礼の１つとして、今も続けられている。地元住民のにぎわいと信仰を通して、コミュニティ形成にもつながっている。

桐生発祥のルーツともいえるこの地には、桐生氏、由良氏に関わる多くの歴史的な環境が残されている。そこでは、桐生発祥の地であることを誇りにし、先人からそれらを受け継いできた地域の住民により、梅原薬師の保存活動や祭礼、天神山稲荷の祭礼等が、地域ぐるみで今でも行われている。

古の歴史に触れる機会の多い環境下において培われた自主自立の地域性、桐生発祥の地としての由緒は、この地に伝わる祭礼という営みのなかで今も語り継がれている。

エ．森沢八幡社祭典

森沢八幡社で行われている祭礼の始まりは定かではないが、先述のとおり八幡社に隣接した田中家には、祭礼を継続するよう代々申し伝えられているということから、江戸時代末期から実施されているようである。

祭礼は、神事と直会という素朴なもので、近年まで一人一品の肴を持ち寄り、十五夜の月明かりで酒宴をひらいていたが、現在は、９月中旬から10月上旬の十五夜に近い日曜日に開催している。秋の豊作を願う意味も込められている。天神山稲荷の祭りと同様に、同じ地域住民の輪番制により、運営されている。当日、神職による神事には、関係者が拝礼し、お祓いを受け、祝詞奏上と玉串奉てんを行う。直会は、直下の広場にシートを敷いて車座になり50名ほどが輪になって酒宴を行う。

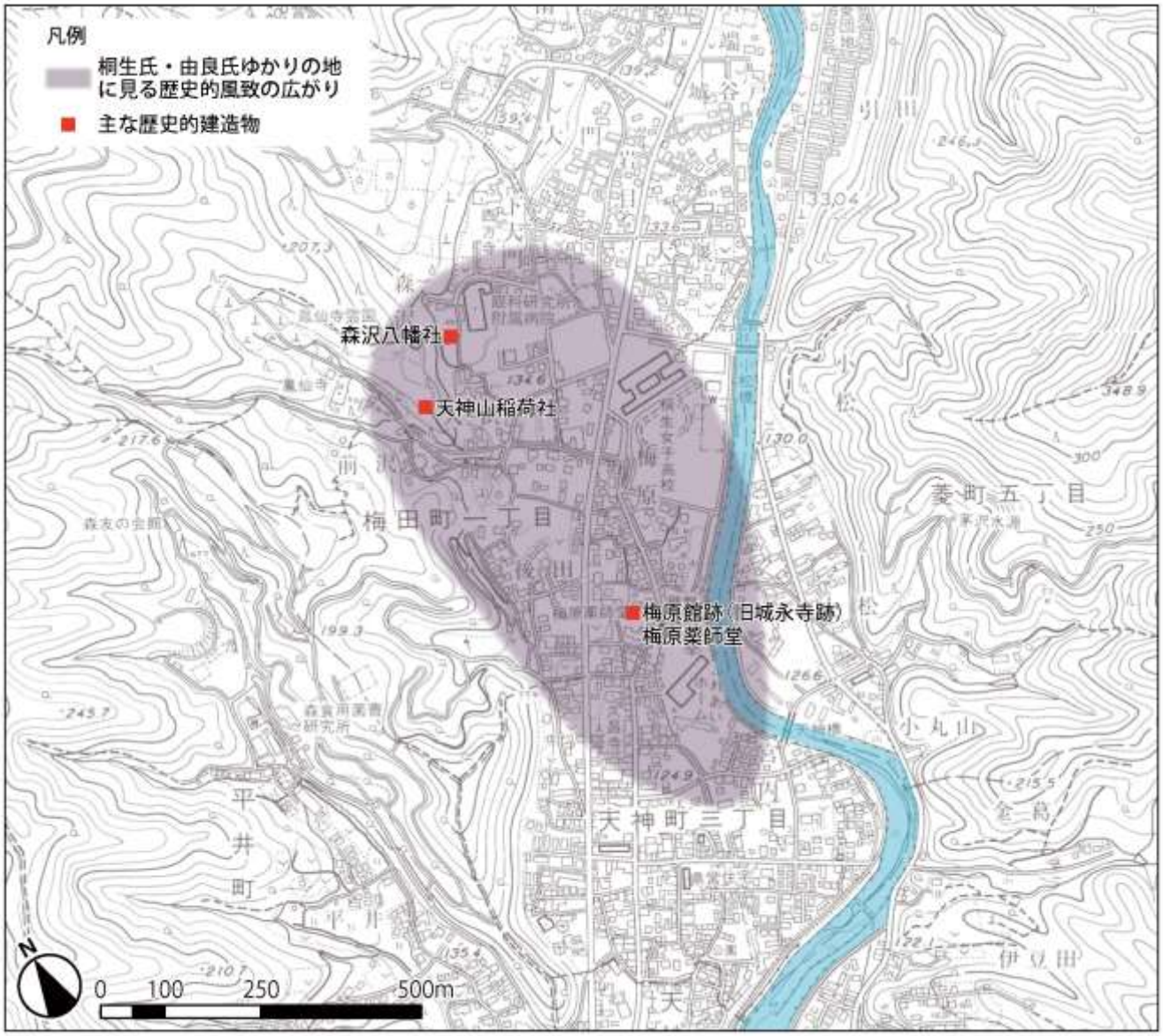
祭礼として派手さはないが、地域住民にとっては、生活とともに根付いた恒例の祭りであり、誰もが楽しみにこの日を迎える。隣家との関係が希薄となりつつあるこの時代に、顔を合わせる貴重な機会でもあり、地域のコミュニケーションと地域の連帯感を示す重要な祭礼が受け継がれている。

森沢八幡社祭典の様子

直会の様子

□　桐生発祥の地の由緒を語り伝える祭礼・行事

以上のように、桐生氏、由良氏ゆかりの地とされる梅田町周辺地域には、梅原薬師堂をはじめ、桐生氏、由良氏ゆかりの社寺などの歴史的な環境が多く残されている。そして、その周辺の住民達は、現在の桐生の礎（いしずえ）とも言えるこの地に生きた先人達の思いを受け継ぎ、梅原薬師堂などの史跡が維持管理され、梅原薬師祭典や天神山稲荷祭典など、この地を舞台とした祭礼・行事が執り行われている。古の歴史に触れる機会の多い環境下において培われた自主自立の地域性、桐生発祥の地としての由緒は、この地に伝わる祭礼という営みのなかで今も語り継がれている。



桐生氏・由良氏ゆかりの地に見る歴史的風致の広がり

［コラム③：城主愛飲のお茶水の井戸］

梅原館跡から程近い町屋の中央に位置する久昌寺（きゅうしょうじ）には、城主愛飲のお茶水の井戸跡が存在している。寺の所伝によると、かつて梅原館が桐生氏によって使用されていた頃、この地には浅井戸があり、その水質が良かったために、館のお茶水に使用されていたと伝えられている。また、桧杓山城のお茶水と言われる井戸は、城の東南口付近にも存在しており、こちらの井戸は今でも水をたたえ、付近の民家で使用されている。城の東南口付近の井戸から、梅原館まで水を運ぶのが大変なため、館近くの井戸をお茶水に使用したとも言われている。

久昌寺の開創は、桐生氏、由良氏の時代より後の寛永年間（1624～1645）とされているが、桐生氏、由良氏が滅び、使用されなくなった井戸周辺の地が空いていたため、久昌寺が建てられたのではないかと推測されている。

久昌寺井戸枠

［コラム④：桧杓山城登山］

桧杓山の麓にある梅田南小学校では、城山（じょうやま）（広く市民は桧杓山を城山と呼んでいる。）への登山遠足を通して、地域の歴史教育が古くから行われている。同校は140年以上の歴史を持つ小学校であるが、職員が学校の行事等の記録を毎日付けている「当直日誌」から、昭和33年（1958）11月の城山登山の記述が確認できる。以降、毎年同じような時期に行われていることが分かる。日誌は昭和31年度（1956）からのものが残されているが、「遠足」の記述はあるものの場所まで記載されていないため確認ができないが、以前から恒例行事となっていたことが想像される。

登山をするのは当時から２年生で、地域の学習授業の一環として、学校から徒歩で山頂（本丸）を目指す。梅田や市街地を望める山頂では、弁当を広げ、引率の教師が、ここがかつてお城であったことを説明する。城主は、この地から城下を見渡し、城内の平安を願っていたと思いをはせながら、地域の歴史に触れている。

その他、地域の歴史について理解を深めるため、桐生氏、由良氏ゆかりの西方寺や鳳仙寺を訪問し、史跡や資料を見たり、住職から話を聞くなどの現地体験学習も行われる。このような学習を通して、この地区の児童は地域固有の歴史を学び、郷土を誇りに思う素地を養っている。

なお、城山は、現在では、山頂までハイキングコースが整備されており、春には山全体がサクラに覆われるほど桜の名所として、多くの市民にも親しまれている。

昭和33年の当直日誌

桧杓山城登山の様子